

V. 考察 —— 広岡前遺跡出土の須恵器について ——

1. はじめに

今回調査した江刺市広岡前遺跡では、平安時代の竪穴住居や土坑など当時の生活に密着した遺構から多種多様な土器が出土した。特に、検出した3棟の竪穴住居内や土坑からは須恵器が多く出土し、土師器とともに良好な資料を得ることができた。出土した須恵器は質・量ともにかなりまとまっており、平安時代の江刺平野における土器様相を考えるうえで重要な資料である。

また、遺跡の約1.8km北西に位置する同市瀬谷子窯跡群は、この地域における最大の須恵器を中心とした窯業生産遺跡である。この瀬谷子窯跡群は、比較的近い位置関係にある本遺跡の遺構や遺物との関連性も注目される。この窯跡群は、政治権力の介入するなかで操業されていた官営的窯業生産地と考えられており、北上川を挟んで対岸に位置する水沢市胆沢城跡は、その生産物の一大消費地である。胆沢城跡はこの地域における政治・文化の拠点であり、周辺の一般集落の動態を知るうえにおいて機軸となる重要な遺跡である。

地図上において両者の中間に位置する広岡前遺跡は、やはり重要な遺跡であると予想される。したがって、本稿では出土した須恵器を中心に考古学的な分析をおこない、これら須恵器の歴史的意義について考え、それを発展させて平安時代における土器の生産と流通に関して若干の予察を加えたいと思う。

2. 出土した須恵器の分類

今回の調査で竪穴住居から出土した須恵器には一定の器種構成が認められ、これは他の周辺集落においても同様である。この構成は、坏・甕・壺の3種の主要な器種からなり、それぞれ供膳形態や貯蔵形態を担う。尚、須恵器に加え土師器には坏・埴・甕・埴などがあり、主に供膳形態や煮沸形態を担うものである。

須恵器坏は、竪穴住居1と竪穴住居3から特に多く出土した。出土した須恵器坏はどれも底部回転糸切り後無調整である。底部の残る破片すべて確認したが、その他の切り離しによるものはまったく認められなかった。

坏や埴等供膳形態須恵器と同じく供膳形態土師器との比率は、掲載した遺構出土須恵器坏・埴が供膳形態全体のうち72%、同じく土師器坏・埴が28%と土師器に比べて須恵器がかなり高い比率で出土している。このような供膳形態にみられる須恵器の偏重傾向は、両者の使用頻度、耐用年数、消費速度による差であるかもしれないが、少なくともこの集落にかなり安定した量の須恵器が供給されていたことを如実に示しているのではなかろうか。ほぼ同じ時期の江刺平野に所在する力石Ⅱ遺跡では、同様の方法でデータを抽出すると、土師器供膳形態78%に対して須恵器供膳形態22%である。同じく落合Ⅲ遺跡では、土師器供膳形態85%に対して須恵器供膳形態15%である。このように当該期の集落において、須恵器の供膳形態が高い比率で出土する例は数少なく、その点において広岡前遺跡はきわめて異例の様相を示す集落である。このような状況が生じる要因として、広岡前遺跡が瀬谷子窯跡群という当時の大規模な須恵器生産地に近在する集落であることと深い関係があるのではないだろうか。しかし、ただ単に距離が近いだけでこのような状況が生じるのだろうかという疑問もある。瀬谷子窯跡群により近い集落の様子が不明であるため断定は避けなければならないが、現段階では瀬谷子窯跡群とこの広岡前の古代集落は、実際の距離的關係よりも実質的に近い関係であったことが考えられる。

一方、貯蔵形態を担うと考えられる須恵器甕は、竪穴住居や土坑から出土している。竪穴住居1床面出土

の甕は口縁形態不明であるが、体部外面上半にカキ目、下半にヘラケズリが施されている。回転ナデにより消えているが、頸部にタタキの痕跡も認められる。堅穴住居3出土の甕も体部外面上半にカキ目、頸部にタタキの痕跡が認められる。両者は体部上半にカキ目が施されるという点で共通する。胆沢城SD114出土の須恵器甕にも同様の器面調整が認められる。さらに、この遺構の一括遺物は9世紀第1四半期という年代が考えられているため、今回出土した須恵器甕の年代についても同様の時期が考えられる。しかし、須恵器坏類は述べた通り、底部回転ヘラ切りのものはみられないことから須恵器坏類は甕よりも若干新しい一群のものであることが考えられる。よって、須恵器のみからみた広岡前遺跡の出土遺物の年代は大まかに捉えれば9世紀初頭～半ばにかけてであると推察される。

須恵器甕にみられるヘラケズリ調整は、東北地方特有の調整技法であり、本来は土師器に施される調整である。体部下半にこのような調整がみられる堅穴住居1出土須恵器甕は東北地方で生産されたものであると考えられる。また、頸部～肩部にかけて緑色の厚い自然釉が掛かっており、かなり長い年数操業された窯で焼かれたものであると推測される。焼成具合も良好で貯蔵形態の器種にしては胎土も精良である。ある程度熟練した工人の手で製作され、東北地方に所在する大規模な窯業生産地で焼成された後、この広岡前遺跡に供給されたのであろう。

3. 出土した須恵器碗

先述した通り、広岡前遺跡出土の須恵器では主に坏・甕・壺の3種が認められる。しかし、少量ながらこれら3種以外の器種も存在する。その一つは碗である。碗は供膳形態であり、坏の一種と捉えることもできるが、口縁部が著しく外反し、体部下半にやや膨らみを持ち、底部にはしっかりと高台が付く。このように、坏とは一線を画す形態を呈し、坏とは大きく異なる要素が多く認められるため、今回は碗という別器種として扱うこととした。

今回の調査で須恵器碗は、堅穴住居3から2個体、I区土坑3から2個体出土した。(図28-4～7) 古代における須恵器碗は、東北地方では出土数が少なく、きわめて稀な器種である。岩手県内では、水沢市胆沢城跡や矢巾町徳丹城跡などで須恵器碗が出土しているが、これらの須恵器碗は、いわゆる稜碗とされるもので、体部下半に強い稜が巡る。これら稜碗は、やや深い須恵器坏に高台を貼り付けた印象を受ける形態であり、底部から口縁部にかけて体部下半の稜で屈曲するもののそれ以外は直線的に立ち上がる形態を呈する。しかし、広岡前遺跡堅穴住居3出土の須恵器碗は、須恵器坏とは一線を画す形態を呈しており、いわゆる稜碗ではないと考えられる。

今回取り上げる稜碗と異なる須恵器碗の形態は、猿投山西南麓古窯跡群(猿投窯)など東海地方で生産さ

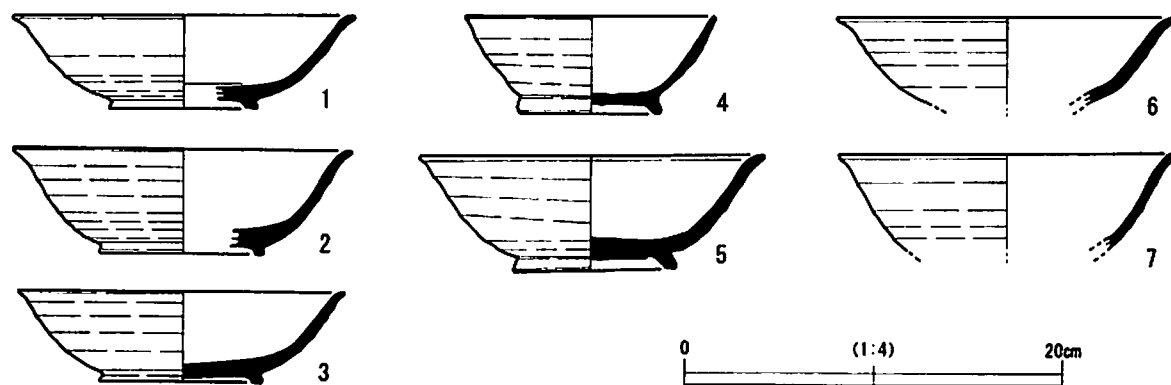


図28 東海地方産施釉陶器と出土した須恵器碗

れた緑釉陶器や灰釉陶器などの施釉陶器碗にみられる形態であり、中でもとりわけ9世紀代と考えられている黒笹14窯式（K14窯式）～黒笹90窯式（K90窯式）の灰釉陶器碗Aと形態および法量が酷似している。図28-1～3は狼投窯にある鳴海支群出土資料を再トレースしたものである。1はNN265号窯出土資料、2・3はNN268号窯出土資料である。これらは、いずれもK14窯式に相当するとみられる。K14～90を区分する属性として高台の断面形状が挙げられる。断面方形のいわゆる角高台と呼ばれる特徴を有するK14窯式碗と断面逆三角形や三日月形のいわゆる三日月高台を持つK90窯式碗とにそれぞれ細分され、年代も9世紀代を前半と後半の半期に区分することが可能である。この属性に注目すると広岡前遺跡出土の須恵器碗の高台は角高台である。このような高台形態から考えて、この碗は9世紀前半に比定されるK14窯式の施釉陶器に何らかの影響を受けて製作されたと考えられる。よって、この須恵器碗は、どのような経緯でどのような影響を受けたかにもよるが、現段階では概ね9世紀初頭～半ばまでの年代が考えられる。

この須恵器碗の生産地は現段階では特定し得ないが、近在する瀬谷子窯跡群で単発的に焼かれたものである可能性も考えられる。

このような須恵器碗は、須恵器というよりむしろ無釉陶器と呼ぶべきものかもしれない。尾野善裕は、K14窯式という灰釉陶器成立期に人工的な施釉のされない施釉陶器と同形態の碗や皿の存在を想定している。このような製品の存否そのものに、まだまだ議論の余地がある段階であろうが、視野に入れる必要はあるかもしれない。

広岡前遺跡出土碗は、竪穴住居3と土坑3出土の3個体が同じサイズであり、土坑3出土の1個体が他の碗より小振りなものである。どの個体もやはり形態は、いわゆる稜碗とはやや異なる。灰釉陶器には、大小相似形の碗がセット関係にあることが知られているが、本遺跡でもこのような大小碗のセットであったのではないかと考えられた。しかし、この土坑3出土の小碗は、口縁部が外反せず、体部の形状は坏に近く、胎土や色調が他の須恵器碗とは異なる点で難がある。この須恵器小碗は、本来他の碗とは別系譜で成立したのかもしれない。

4. 出土した須恵器水瓶

出土した須恵器の中で、碗と同じく主要な器種から外れる須恵器の一つに水瓶がある。この須恵器水瓶は、竪穴住居1の床面から出土し、口頸部から肩部までは完存しているが体部は出土していないため全体の形状は明らかではない。しかし、わずかに残存する肩部の張りがあまりみられず、いわゆる「なで肩」であることから体部の形状は正立した卵形を呈すると推測される。長頸壺あるいは長頸瓶の一種と捉えることもできるが、頸部が細長く、卵形の体部が想定されるため、今回は「水瓶」として報告した。

この須恵器水瓶という器種は特に岩手県での類例に乏しく、比較に応ずる資料がみられないため器種について「水瓶」であるという確証は無く「浄瓶」である可能性も考えられる。しかし、「浄瓶」であるための条件として、肩部に子持ちの注口の存在と頸部の鐮状突起および極細の口縁部の存在が挙げられる。しかし、今回出土した須恵器「水瓶」には肩部注口に繋がる痕跡は認められず、鐮状突起は頸部上方ではなく口縁端部直下に付けられている。口縁端部直下に鐮状突起が付いている水瓶の例は唐代の定窯産白磁（白瓷）水瓶があるが、今回出土した須恵器水瓶と比較するには、あまりにも遠くかけ離れた存在であるため比較の対象とはなり得ない。ただ、本来中国で金属製の仏器として製作されていた「水瓶」や「浄瓶」は、日本では主に施釉陶器として生産されているが、稀に無釉の「須恵器水瓶」もみられる。これら須恵器水瓶の多くが東海地方を中心に生産されており、東海地方を中心に周辺で流通しているようである。東海地方における須恵

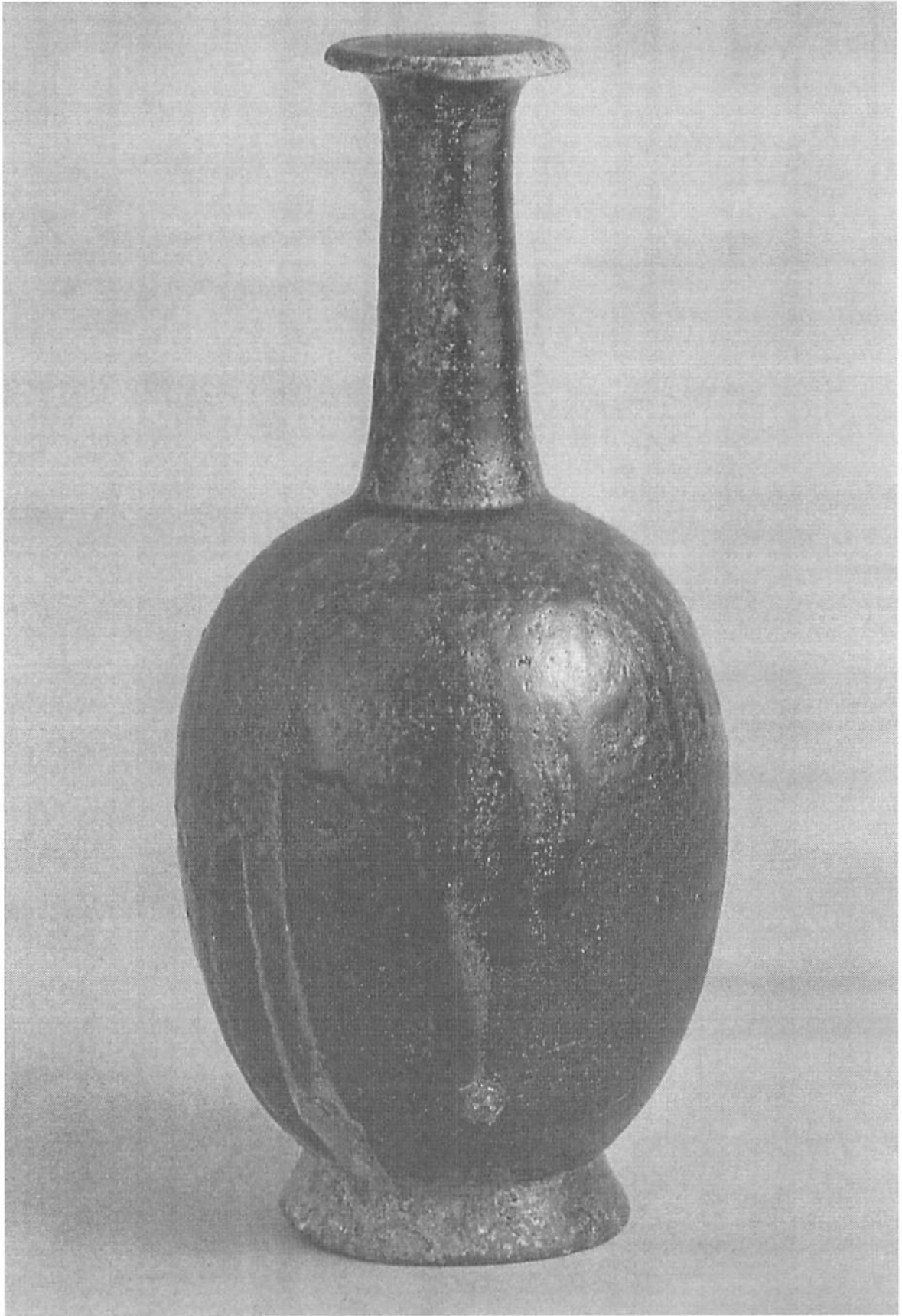


図29 灰釉陶器水瓶（日本陶磁全集 6 より）

器水瓶は8世紀頃からみられ、8世紀代のものは頸部中に明瞭な横方向に沈線が施されているが、9世紀代になるとその沈線はみられなくなるようである。今回出土した須恵器水瓶にはそれに該当する沈線はみられない。また、東海地方では、灰釉陶器の「水瓶」や「浄瓶」などの器種が生産されるが、これらの器種が出現するのは9世紀後半と考えられているK90窯式であり、10世紀前半と考えられている折戸53窯式（O53窯式）では減少し、その後姿を消す。以上のことから考えても、この須恵器水瓶は9世紀から10世紀前半までの年代幅の中に収まるものと考えられる。

広岡前遺跡出土の須恵器水瓶を詳細にみていくと器面調整において次のような特徴がみられる。頸部外面には、縦方向のヘラミガキが密に施されている。緑釉陶器の古段階では、1次焼成前にヘラミガキが施されることがあるが、通常ヘラミガキのように器表面の光沢を表出させるような器面調整が、須恵器にみられることはない。このような器面調整が施される背後には、光沢を得たいという意識が強く感じられる。すなわち、施釉されない須恵器に比べて施釉陶器の方がガラス質化した釉薬によって艶やかな器表面を呈する。しかし、今回出土した須恵器水瓶は、施釉されていないため器表面は生の素地そのままである。そこで、器表面の艶や光沢を得るために本来須恵器では用いられないヘラミガキという調整技法が施されたものと考えられる。この調整が施されている須恵器水瓶には、施釉陶器の外観に近付けようとする意識が見え隠れしているのではないだろうか。

通常、土器製作において最終的な器面調整であるヘラミガキは焼成前に施される。例に違わず、この須恵器水瓶も焼成前にヘラミガキが施されており、すでに器面調整の工程段階で施釉による器表面の艶や光沢が得られないという前提があったかと推定される。もし、施釉陶器を意識していたなら、この前提がある以上焼成前の段階において、すでに施釉が断念されていたものとみるべきであり、この須恵器水瓶は施釉陶器を意識していたが、焼成前から優品に近付けようとしながら須恵器として製作されたと考えられる。つまり、この須恵器水瓶は施釉陶器を製作しようとした結果、偶発的に施釉陶器の枠からこぼれ落ちた「須恵器」ではなく、あくまでも施釉陶器を意識・指向した「須恵器」であったと理解できる。

では、先行して述べた須恵器壺と同じように今回広岡前遺跡で出土した須恵器水瓶はどこで製作されたものだったのであろうか。胎土を肉眼で観察すると、大きな砂粒は認められず、粒径の小さな白色砂粒が極少量認められる精良なものである。また、破断面はやや赤みを帯びている。このような肉眼の観察から瀬谷子窯跡群で焼成された可能性が考えられる。また、須恵器壺と同じく大規模な須恵器生産域に近在する集落で出土した須恵器であるので、やはり、瀬谷子窯跡群で焼成された製品である可能性が最も高いのではないだろうか。ただ、このような器種が瀬谷子窯跡出土須恵器にみられないばかりか、主要な供給先である胆沢城跡や周辺の集落からも出土していないため、瀬谷子窯跡群で焼成されたものであっても単発的で極少量だけ生産された器種であったと考えられる。その希少な製品が堅穴住居から出土する集落は、この点においても特殊であり、須恵器生産と深い関わりがあったことが想定できるかもしれない。

このような須恵器水瓶の用途は判明していないが、先述した通り、丁寧な器面調整が施され、大量生産されない器種である。このことから少なくとも日用雑器ではないことは疑う余地はなく、何らかの非日常的な用途が考えられる。本来は仏器の一つであるが、形態も本来のものより崩れているため仏器としての機能を具備していたとは思えない。しかし、何らかの祭祀や儀礼行為に際して用いられたものであったのだろう。また、時には威信財となったのかもしれない。

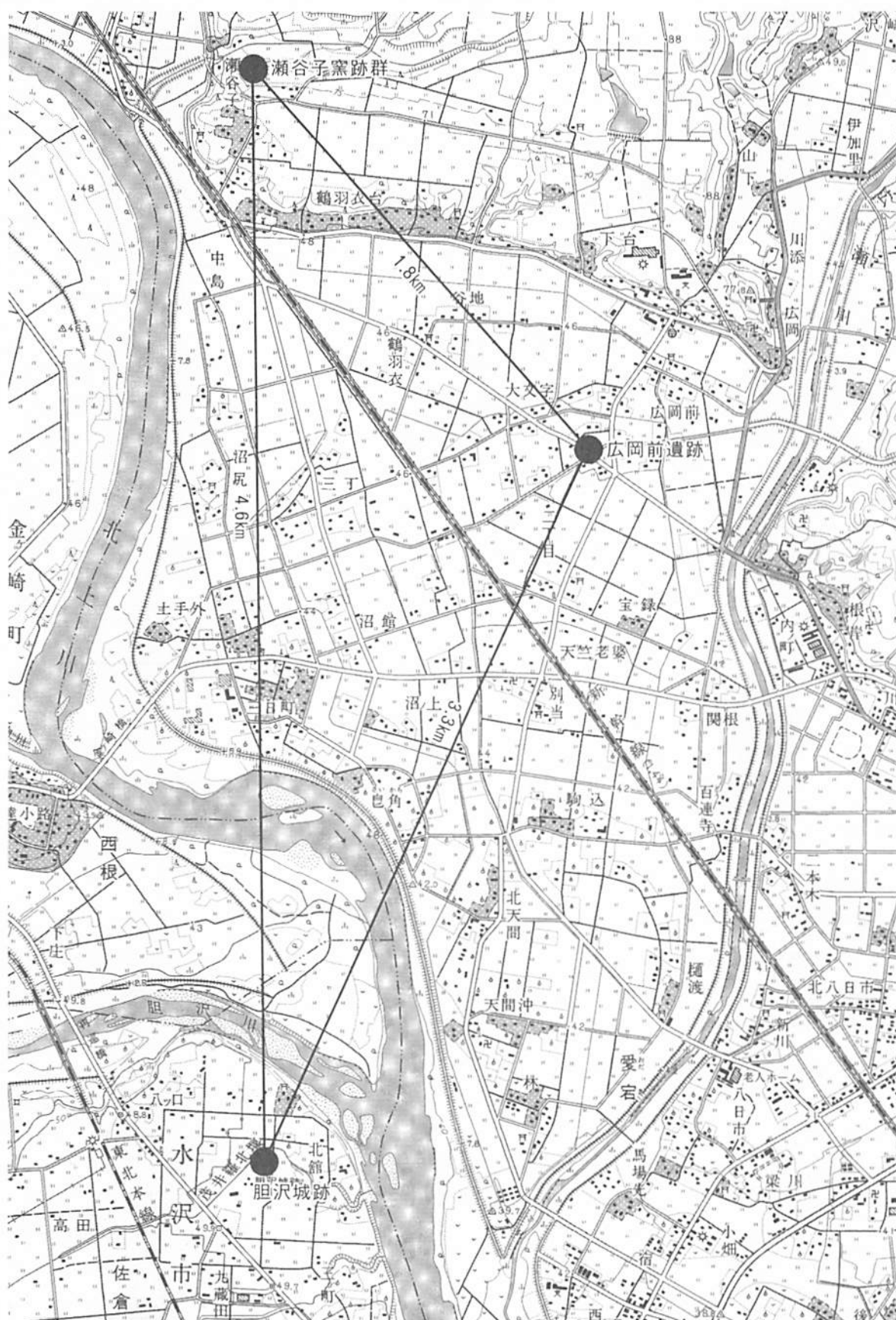


図30 広岡前遺跡と他2遺跡の位置関係

5. 施釉陶器と特殊須恵器との関連性

須恵器碗・須恵器水瓶、いずれもこの地域においては特殊な遺物である。また、それぞれの項で述べた通り、これら特殊須恵器は施釉陶器と密接な関係がありそうである。両者の関係は形態の類似から模倣という行為が採択されたと推測される。その行為を探るために器の模倣という行為について考えてみたい。

数多く種類のある器には「模倣される側面」と「模倣する側面」がそれぞれ存在する。より上質な器はその他の器によって目標とされ、そして模倣されるのが器の常道である。このような器の模倣には段階的な序列が絶えず存在する。例えば、模式的に表すと以下の通りである。

①「金属器」→模倣→②「磁器」→模倣→③「施釉陶器」→模倣→④「須恵器」→模倣→⑤「土師器」

ただし、①～⑤の各段階はその前後において直接的に模倣されるとは限らない。①～③のような卓越した技術が必要とする器は、都城を始めとする先進地に供給され消費されている。このような技術の高低差を反映している序列順序の逆転はないだろうが、それぞれの間が飛ばされて模倣がおこなわれる可能性は考慮に入れる必要があろう。

しかし、今回のテーマである③・④間は成形から調整に至る製作過程がほぼ同じであり、窯での焼成段階で初めて両者は分離されると想定されるため③→④の模倣構図は崩れないと考えられる。このことから両者を分けるのは焼成技術であることは間違いない。つまり、この場合器の成形から調整を経た形態は模倣できても焼成により変化する質に関しては対応できなかったのではなかろうか。もちろん、焼成まで対応できれば施釉陶器模倣の須恵器ではなくなるのだが、今回の出土資料は焼成技術の未熟故に「模倣」に終わったと解釈できる。須恵器は焼くことができるが、施釉陶器は焼くことができないというジレンマが施釉陶器模倣須恵器に現れているのかもしれない。

では、このような生産活動の中で起こるジレンマが表出されている特殊須恵器が出土した広岡前遺跡はどのような集落だったのであろうか。一般的に東北地方における施釉陶器は、猿投窯などの東海地方産とみられるものが遠隔地である城柵や官衙遺跡へ搬入され出土する。一方、一般的な集落での出土は極めて少ないという事実を考えると、これらは非常に貴重で入手困難な品であったに違いない。と同時に、これら施釉陶器は在地にある主要な生産地では生産されていなかったということも想像に難くない。しかし、今回の広岡前遺跡のように一般的な竪穴住居から施釉陶器に似た須恵器が出土したことは、次の2点が想定される。一つ目は、城柵や官衙と一般的な集落との間隙を埋めるようなやや有力な集落であった。二つ目は、施釉陶器に似た須恵器を作った須恵器工人と近い関係にある人々の集落であった。以上のいずれか、あるいは両方の要因が備わった集落であったことが想定できる。ただし、二つ目は周辺で施釉陶器に似た須恵器を作ったという前提が必要である。

しかし、いずれにせよ、広岡前遺跡はこの地域においてきわめて特殊な集落であったことだけは間違いなさそうである。

今回出土した須恵器碗や須恵器水瓶は、これまで言及した通り施釉陶器の外観を意識、模倣して生産されたと考えられる。当時の施釉陶器主要生産地である東海地方の窯や工人、あるいはそこで生産された製品そのものとのような関係があったのか注目される点である。一般的に、施釉陶器が焼成される地域では須恵器生産が盛んである、または、かつて盛んであったことが多い。また、主要生産地においては施釉陶器が須恵器と併焼される例も多くある。つまり、施釉陶器の成立および発展は、大局的に言えば須恵器生産と

ハード面・ソフト面で密接な関係にあったと言う事ができる。しかし、施釉陶器の生産技術の方が須恵器のそれより高いものであったことは言うまでもない。これらの須恵器壺や水瓶が瀬谷子窯跡群で生産されたものであれば、瀬谷子窯跡群の操業にあたって東海地方から技術の伝播や工人の移動などがあったことが予想される。特に形態のみならず、法量まで酷似するものを作るということは、熟練した技術を持った製作工人の存在が窺えよう。しかし、今回紹介した須恵器水瓶は、施釉陶器の主要生産地のものとは形態からして似て非なるものである。これは、先の須恵器壺とは異なり、曖昧な情報や技術を形にしたから起こりえたのかもしれない。だとすれば、特殊須恵器として一括して扱っていたが、実は両者は存在する歴史的意味が異なることになる。一方は先進的工人移動の可能性を示唆するが、一方は先進的工人不在の可能性である。このような矛盾は現段階においては即座に明らかにできないが今後注目していくべき問題であろう。

このような関心事について瀬谷子窯跡群ではいくらかの興味深い事実がある。すなわち、瀬谷子遺跡出土のあかやき土器の中に施釉陶器の形態を模倣した高台付皿、段皿が出土しているという事実である。現時点では、瀬谷子窯跡群における須恵器とあかやき土器の関係は曖昧さを残しているが、少なくとも10世紀には東海地方より、この地域に施釉陶器の影響を受けた土器が生産されていたことは疑いがあるまい。これに関しては小笠原好彦も指摘している通りである。東海地方の影響によって、10世紀段階に施釉陶器様あかやき土器生産がおこなわれた瀬谷子窯跡群では、それに先行する9世紀段階に施釉陶器様須恵器生産がおこなわれていても不思議ではない。

6. まとめにかえて

広岡前遺跡出土の須恵器を様々な角度から概観した。その結果、竪穴住居や土坑などから出土した須恵器の器種構成は9世紀代の集落におけるセット関係が明瞭であった。その中で須恵器供膳形態は、土師器のそれを大幅に上回る量が出土しており、当該期における一般の集落遺跡としては非常に珍しい様相である。この事実から、その他の江刺平野に存在する周辺集落に比べ極端に潤沢な須恵器保有が窺える。供膳形態全体における須恵器の占める割合は岩手県内の当該期集落と比較してもかなり高いと考えられる。このことは、本遺跡に近在する瀬谷子窯跡群の存在がその背景にあると予想できる。

この大規模な窯跡群は、胆沢城跡から多くの製品が出土しており、官営的性格が強いものと考えられているが、もし、この瀬谷子窯跡群が官営の土器生産地であれば、本遺跡との関係は地理的な繋がりのみならず、政治的な繋がりをも考えざるを得ない。広岡前遺跡は、地理的には須恵器の大規模生産地である瀬谷子窯跡群と須恵器の大量消費地である胆沢城との中間に位置しているが、それ以上に需要と供給のシステムの狭間に位置していると考えられる。これは、まさしく政治的な背景が見え隠れしている事象の一つではないだろうか。このような政治的な繋がりについて考古学的に言及することは非常に難しいが、周辺の集落との細かな比較をおこなうことで何らかの手がかりを掴むことが出来るかもしれない。本遺跡の所在する稲瀬地区では、平安時代集落の様相があまり明らかになっていない。よって今後、周辺での調査が進めば比較の対象資料が増え、より瀬谷子窯跡群と周辺集落との比較によって具体像に迫ることが可能になるであろう。今後、注目すべき事象である。

さらに、今回の調査では、施釉陶器との関係を強く示唆するような須恵器が出土した。須恵器壺と須恵器水瓶がこれにあたる。これらは、その形態から東海地方を中心に生産されていた施釉陶器の外観を意識、あるいは模倣していると考えられる。特に、このような須恵器が施釉陶器を模倣したものだとなれば、モデルになった施釉陶器の時期より古く遡るようなことはあり得ない。さらに、大幅に時期が新しくなることも考

え難い。模倣須恵器とモデルの施釉陶器は、同時期あるいは模倣されたものがやや新しいということが想定できる。このことから、今回出土した須恵器碗はK14窯式の施釉陶器の模倣である可能性が高いという点から9世紀初頭～半ば頃のものと考えられ、同じく須恵器水瓶は碗よりも不明確であるが、器種の消長から9世紀代のものと考えて良さそうである。以上の年代観は、堅穴住居出土の土器年代に齟齬を来すものではないため、そのままストレートに採用できそうである。

これら須恵器碗や須恵器水瓶は、遺跡周辺を含む東北地方ではきわめて珍しいものであるため、広岡前遺跡と東海地方との間に何らかの接点が存在すると考えられるが、直接的な接点を見出すことは現段階では困難である。しかし、そこに瀬谷子窯跡群を挟み込むことにより、東海地方との関わりを積極的に評価することができるかもしれない。先述した通り、この遺跡は須恵器の圧倒的保有量によって瀬谷子窯跡群との深い関係が想定されるため、東海地方と広岡前遺跡とが直接繋がらなくとも瀬谷子窯跡群を介する形で繋がっていたとも考えられる。加えて、これまでの研究で瀬谷子窯跡群と東海地方とは、あかやき土器生産段階で繋がりをみることができる。このことは、少なくとも10世紀代には東海地方から技術や知識が伝播していることを示している。しかし、広岡前遺跡で出土した須恵器?の存在によって、さらに古い段階である9世紀代に東海地方と瀬谷子窯跡群との繋がりが具体性を帯びてくとも考えられる。もっと言うならば、9世紀代に瀬谷子窯跡群で東海地方の影響を受けた土器が生産されていた可能性が考えられ、瀬谷子窯跡群操業初期段階から東海地方より技術が伝わっていた可能性が高くなった。瀬谷子窯跡群が官営的性格を持つ土器生産地であるとすれば、東海地方から政治的な主導のもと技術あるいは工人が移動してきたのであろうか。現段階では不明確な当時の土器生産・窯業生産について言及できる数少ない重要な出土遺物であることは間違いない。

最後に、広岡前遺跡・瀬谷子窯跡群・東海地方の窯業生産遺跡・胆沢城跡の相互関係が現時点では不明確であり、今回述べたことも憶測の域を脱することができない。

また、今回は扱う資料を須恵器のみに限定して分析をおこなったが、その他の遺物に関しても今後検討材料に加えていく必要があろう。

なお、本稿は調査を終え、感じたままを吐き出すように述べたのみの感があり、積極的に評価できなかった部分も多くある。その部分に関しては、筆者の実証作業不足に他ならない。勝手ながら今後の予察としておきたい。

引用・参考文献

- ・小笠原好彦「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』1976・伊藤博幸「陸奥国における黒色土師器 ―その展開と終焉―」『東国土器研究第3号』1990 東国土器研究会
- ・高橋信雄ほか「主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書（岩手県江刺市力石Ⅱ遺跡・兎Ⅱ遺跡・落合Ⅲ遺跡・朴ノ木遺跡）」1979（助岩手県埋蔵文化財センター）
- ・大川 清ほか「岩手県江刺市瀬谷子窯跡群緊急調査概報」1969 窯業史研究所
- ・大川 清「岩手県江刺市瀬谷子窯跡群第2次緊急調査概報」1970 窯業史研究所
- ・小島一夫ほか「名古屋市文化財調査報告Ⅵ 徳重西部土地地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘報告書」1976 名古屋市教育局委員会
- ・小島一夫・平出紀男「名古屋市文化財報告ⅩⅢ NN-268号古窯跡発掘調査報告書」1983 名古屋市教育局委員会
- ・山下峰司「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』1995 中世土器研究会

- ・尾野善裕「灰釉陶器生産技術の系譜」『橘崎彰一先生古希記念論文集』1998 橘崎彰一先生古希記念論文集発行研究会
- ・高橋照彦「平安期施釉陶器研究の現状と課題 ―緑釉・灰釉陶器を中心に―」『中近世土器の基礎研究 X V』2000 日本中世土器研究会
- ・佐藤雅彦「陶磁大系 第37巻 白磁」
- ・橘崎彰一「日本陶磁全集 6 白瓷」1976
- ・橘崎彰一「陶磁大系第五巻 三彩・緑釉・灰釉」1973
- ・齋藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』第211号1982
- ・小笠原好彦「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』1976